言語における自然と人間――言語学史より

　田中克彦

　千葉大学

　2016. 11.17

**1)「種の起源」と言語学**

1859年にダーウィンが「種の起源について」を発表すると、たちまちのうちに、この「生物進化論」は、はげしい議論の中心になった。それを示す論文は1860年にハクスレイが行った勤労者大学における６回の講演の記録「自然界における人間の位置」で、これは1863年にまとめて刊行された。この論文の表題にあらわれているように、問題は、生物という自然の領域から、人間の領域へと移されたのである。

　当時の学問の領域でのできごとは、学問のある領域で発生したことがたちまち別の領域に移されて、そこでまた特別の展開を見せたことである。言いかえると、今日のように、学問が専門ごとに分断されずに、すなわち諸学問ではなくて、単一の学問と感じられていたのである。

　ドイツでは生物学者のE. Haeckelが「種の起源」に敏感に反応し、1863年に行った講演Ueber die Entwicklungstheorie Darwin'sが学会誌に掲載されて大きな反響を呼んだ。ここでヘッケルが主張したのは次のことだ。この世に存在する種（Art, species）は従来となえられていたような、「おのおの他のすべての種とは無関係の独立した単位であり、創造者によって個別的につくられたもの」ではない、この世の生物、自然的体系の全体」は「一本の系統樹の姿」となり、「『ひろく枝分かれした樹木の形』として表現される」と考えた。

　この考え方にいたく心ゆさぶられたのは、ヘッケルと同じイェーナ大学で言語学を講じていたＡ．シュライヒャーであった。シュライヒャーはよほど感激したらしく、ヘッケルの論文が雑誌に発表された同じ年、たぶんその直後に次のような論文を書いた、Die Darwinsche Theorie und die Sprachwissenschaft（ダーウィン理論と言語学）である。これはヘッケルに宛てた「公開回状」（Offenes Sendschreiben）という形をとっているけれども、ヘッケル一人に宛てた手紙のまわし読み、一般への公開が意図されている。

　シュライヒャーは言語学の教科書の中では、人間の言語、たとえば、インド=ヨーロッパ諸語は一つの祖型にさかのぼり、その想定される単一言語で一篇の物語を書いた奇妙な人ということになっているが、この書簡の内容はもっと深刻なものである。これからの言語学は、そのモデルを生物学にとらなければならないと言い、言語の本質的性格を次のように述べている。

諸言語は自然の有機体であって、人間の意志抜きで決定され、成立し、一定の法則に従って成長、発展し、そして死滅するものである。

この引用の中で私が最も注目すべきであると考えているのは“ohne von willen des Menschen bestimmbar zu sein”というところで、言語の発展は「人間の意志が関与するところなく」行われるという一節である。

**2)青年文法学派の自然科学主義**

　後に青年文法学派Junggrammatikerという一派が生まれて、シュライヒャーのこの言語説を一層確信をもって定式化して主張した。

　1863年にシュライヒャーが発したこの信条のような句は1878年にH. オストホフとK. ブルークマン連名の論文で、より厳密な形をとって表現される。すなわち、「音韻法則は純粋に生理学的な起源をもつかぎり、例外なく作用する法則である」と。

　私が特別に注目を寄せているのは、この同じ1878年に、経済法則について、F. エンゲルスが同じことばを用いて次のように表現していることだ。

商品生産にも、他のあらゆる生産形態と同じように、それは独特の、固有の、それと切りはなすことのできない諸法則がある。これらの法則は生産者自身にもわかっていないのであって、彼らは長い経験をつうじてはじめて、しだいにこれを発見しなければならないのである。だからこれらの法則は、生産者とは独立に、生産者に対して、彼らの生産形態の盲目的に作用する自然法則として、自己を完徹するのである。

　この一節は、後に「空想と科学」にほとんど同じことばでくり返されている（岩波文庫72ページ）

　いったい、この人間現象があたかも自然法則によって支配されているという考え方は、経済学と言語学のどちらが先に生まれたのだろうか。その答えは、明らかに言語学が先で、経済学がその後だということである。というのは、ブルークマンやレスキーンが経済学を学んだ形跡はないが、エンゲルスは、かれらよりはるかに勉強家であり、この「アンティ・デューリング論」では、ボップ、グリム、ハイゼ、ベッカーなどの著作にふれているからである。

**3)ソシュール――「歴史の介入は言語学者の判断を狂わすだけである」**

F. ド・ソシュールは1876―1880の間、青年文法学派の最盛期にライプツィヒに留学した後、ジュネーヴ大学で1906―1911に一般言語学を講義した。その内容は青年文法学派とはまったく異なる言語像について語られている。その核心は次のとおりである。「言語はそれ自体で発達する有機体ではなく」、「社会制度であって個人の外にあり、個人の力ではこれを変えることはできない」。

　つまり、青年文法学派の有機体説を否定したが、言語の変化の理由を「個人の外にある」とした点ではこれを自然法則にゆだねた青年文法学派と変わるところがない。ソシュール自身は、この考えかたをどこから手に入れたかを明らかにしてはいないが、ドロシェフスキーなど、何人かの人が指摘したところでは、E. デュルケムからである。

　デュルケムの「社会学的方法の規準」は1895年に刊行され、この書もまた、自然科学と比較しながら、社会学の固有の対象とは何かを問い、それを「社会的事実」と名づけている。社会的事実とされる慣習、貨幣、言語など、それらをつくったのは個人であるが、いったんつくられてしまうと「個人に外在し、個人の欲すると否とにかかわらず」、ある命令的で強制的な力を帯びることになる。そしてこれらの「社会的事実」は感情を加えず、「モノを研究するように」研究されなければならないという。

**4)シューハルトの反論**

青年文法学派の「例外のない音韻法則」のテーゼがあらわれて間もなく、それに鋭く反対の立場を表明したのがH. Schuchardtであった。その基本的たちばはÜber die Lautgesetze. Gegen die Junggrammatiker1885年であった。シューハルトは、この中で音韻法則に反する多くの例をあげ、言語の変化に対して、話す人間がいつも無意識であるのではないことを示そうとした。音韻法則とは、話す人間が、言語の使用に際して無意識であり、人間の意識や心理的抵抗を超えて言語が変化することを前提としている。ところが「音韻変化には心理的要因」があり、言語とは自然現象ではなくて社会的性格のものであるから、この二つの要素に依存していると主張する。

　社会的性格という点からすると、あらゆる言語は、異なる方言や、異なる言語と接触していて、それからの影響、すなわち、混淆を考えに入れないわけにいかない。

**5)ソビエト言語学のたちば**

この「社会的性格」の議論を深めていくと、言語の諸性格という議論に発展せざるを得ない。そこで、シューハルトの見解に強い共感を示したのが、ソ連の言語学であった。

　ソビエト言語学を率いたN. Ja. Marrは、グルジア出身の人で、黒海と地中海によってへだてられた、カフカス諸語とイベリア半島のバスク語とは、今日のように印欧諸語がこの地域に侵入し、おおってしまう以前は、連続した言語地帯をなしていたと考える、イベロ=カフカス語派に賛成する人であった。シューハルトもまたこの地帯の言語に関心を抱く人であったから、二人の間に実証的な材料をめぐっても、たがいの研究に注目していたと考えられる。

　このようにして、シューハルトは、ヨーロッパの言語学界ではやや孤立していた人であったが、ソ連では極めて尊敬されるようになった。

　その時代に書かれた代表的な論文がV. I. AbaevのO “foneticeskom zakone”1933である。この論文はエスペランチストの大島義夫によって日本語訳され1947年に刊行されているが、基本的には青年文法学派に反対したシューハルトの論文を、ソビエト言語学の用語で言いかえたものである。

**6)チョムスキーによる単一・普遍の人類言語**

　20世紀の前半は、ソシュール言語学の影響が支配的になった結果、言語学の関心の中心は、共時態における言語の構造――すなわち、脱歴史のサンクロニーとへ移った。ところが、記述言語学がその頂点を迎えた段階で、チョムスキーが現れ、17世紀の普遍文法への回帰をもたらした。それは、変化しないものとしての言語の神学とも呼び得るだろう。

　しかし記述言語学、それまでは「言語」とは呼べないはずの、いわば準言語への記述へと向かうにつれて、共時態に反映された「歴史」を見ずにすますことはできなくなった。ここで私が言っているのはクレオール語の記述のことである。クレオール語研究は、それらの母胎となった言語との関係を考えるや否や「言語変化」の問題に触れずにはいられなかった。こうして、チョムスキー学の進展と同時に、それとはうらはらに「言語変化」に関心を示す多数の研究が現れた。1990年代のことである。

　この問題は理論的には、自らの内に変化の要因をもたない共時態の中から変化が生ずるのはなぜかという問いと一体になっている。ソシュールは「変化はいっさいの意図をもたず」、「偶然的（accidenntel）で特異的（particulier）であるとして、変化そのものを体系から除外することによって言語学から排除したのいである。

**7)言語変化への新しい見方**

　言語が変化することはふつうは歓迎されない。変化は常に「みだれ」として受けとられる。動物の言語（伝達手段のことをかりにこう呼んでおこう）は何万年たっても恒常で変わらないと考えておこう。たとえばスズメのさえずり声は、奈良時代から今日までいかに変化したであろうか。この問いに答える仕事は動物学者にまかせておくとして、人間の言語は確実に変化しているのは、疑いのないところである。

　ではどのような理由でことばは変化してきたのだろうか。それは、ことばを話すということが、「自由で目的をもった行為」（Ｅ・コセリウ）だからである。自然科学にあっては、ある現象の理由は、「原因」によって説明される。これが「科学的説明」の唯一の正しい方法だとされ、言語学は科学になろうとするあまり、青年文法学派以来、ひたすら「原因―結果」で事態を説明してきた。しかし言語を用いることが「自由で目的をもった行為」であるかぎり、言語の構造における安定性も話し手の目的にかなっており、変化もまたそうなのである。つまり、言語は人間の肉体と音声という自然を用いながら、たえず自然を超えるために用いられている。このことを皆さんとともに大いに議論してみたい。